

近世の日記に見る旅と災害—19世紀庶民の旅日記「虎勢道中記」を中心に—

(ブリティッシュ・コロンビア大学「旅」ワークショップ参加論文)

北原 糸子

KITAHARA Itoko

(事業推進担当者)

2006年8月4日、5日の両日、ブリティッシュ・コロンビア大学日本研究センターとアジア研究学部の共同主催による「旅」のワークショップが同大学のキャンパスで開催された。同大学アジア学部は神奈川大学21世紀COEプログラムの提携校であるため、福田アジオ拠点リーダーとともに、このワークショップに参加した。その際、わたしのCOEでの研究テーマに絡む災害と、このワークショップの「旅」のテーマに関連する論文を提出したので、年報に掲載していただくことになった。

まず、このワークショップ、およびそこで披露された同大学アジア図書館の誇るビーンズ地図コレクションについて簡単に報告しておきたい。

I 「旅」ワークショップについて

1 プログラム紹介

ワークショップのプログラムは次のようなものであった。

UBC Travel Workshop Program

August 4 (Friday): 14:00-16:00

Exhibition of Beans Maps at Room 227, the Irving K Barber Centre

Tomoko Goto, Ralph Stanton (UBC): Introduction to the Beans Collection

Bronwen Sprout (UBC): The Digitization of the Beans Maps

August 5 (Saturday): 8:30-17:30, Conference Room, C. K. Choi Building

Session 1 (8:30-10:30): New Approaches to Maps, Illustrations, and Diaries

Nam-lin Hur (UBC): Chair and Discussant

Ajio Fukuta (Kanagawa): 名所図会による生活絵引き編纂の試み

Itoko Kitahara (Kanagawa): 近世の日記にみる旅と災害

Shino Yamamoto (Tabinobunka): 富士信仰と洞穴：「人穴」と「御胎内」にみる近世庶民の信仰と旅

Session 2 (10:45-12:15): Religious Sites and Geographic Imagination

Peter Nosco (UBC): Chair and Discussant

Max Moerman (Barnard): The Buddhist World Map and the Tokugawa Cartographic Imagination

Fumiko Umezawa (Keisen): Development of Pilgrimage to Osorezan in Tokugawa Japan

Session 3 (13:30-15:00): Famous Places and Travel Guides

Max Moerman (Barnard): Chair and Discussant

Kären Wigen (Stanford): Coming Into Focus: The Depiction of Mountains in Edo Atlases and Dôchûzu

Monika Dix (UBC): Adventures of Commoners on the Road to Famous Places: Pleasures and Dangers of the Tôkaidô

Session 4 (15:15-17:30): Travel Diaries, City Maps, and Literary Works

Christina Laffin (UBC): Chair and Discussant

Sayoko Sakakibara (Stanford): The Development of Edo Slums and Saiankoku no Tokyo (In Darkest Tokyo), a "Guidebook" to the Underside of Tokyo

Hidemi Shiga (UBC): Edo Women on the Road: Pleasures and Hardships in Travel Diaries

Kazuaki Komine (Rikkyo): 円仁, 成尋ら留学僧の「求法の旅」と異文化交流

Conclusion

このワークショップを企画した許同大学アジア学部教授が開催挨拶と最後の討論の総括を担当された。

2 ビーンズコレクションの紹介

さて、以上のプログラムに先立ち、ワークショップ開催前日、アジア図書館の所蔵するビーンズ地図コレクションの紹介が8月4日に行われた。これは、UBCのアジア図書館が誇る日本地図関係のかなりまとまったもので、今回のワークショップに関係する地図の実物を前にして、コレクションの担当司書をされている後藤朋子氏から解説が施された。私事ながら、30年ほど前にこの大学のアジア図書館で研修員としてカレルをもらい、自分にとっては最初の著書になる原稿を書いていた経験があり、ビーンズコレクションの目録を当時担当の男性の司書氏から頂いた覚えがあったので、懐しい思いで解説を拝聴した。その後、日本でも江戸図に関する所在目録を兼ねた研究の集大成ともいえる俵元昭・飯田龍一『江戸図の歴史』（築地書館、1998年）が出版され、江戸図に関するまとまった情報が公にされるようになった。しかしながら、今回、ビーンズコレクションにしかない大坂の明暦の木版地図の実物が紹介されたのは驚きである。これはたしかに、京都・大坂の地図コレクターとして著

名な大塚隆氏のコレクション（現在は大部分が京都大学博物館および京都市歴史資料館に寄贈されている）にもない珍しいものであった。デジタル画像はまだ整備されていないということであるが、大坂の木版地図としては最初となるものであり、極めて貴重な存在といえる。⁽¹⁾

このコレクションについては、1987年に海野一隆氏が調査され、その報告も活字化されている。⁽²⁾ 今回は海野論文に基づいて、司書の後藤朋子氏が整理された情報を巻末の資料に付しておく。

II ワークショップにおける講演のなかから

参加者の講演はセッション1の福田アジオ氏、山本志乃氏、北原の3名は日本語で、後のセッションはすべて英語で行なわれた。福田氏は絵引き編纂についての概要を説明された。これはすでに第2回国際シンポジウムで詳細な発表がなされたものであるから、省略する。

ここで、わたしの発表を含め、近世庶民の旅と信仰に関連する発表をされた山本志乃氏の富士信仰、梅沢ふみ子氏の恐山信仰について多少の紹介をし、それぞれの内容に共通する問題について予め論点を提示しておきたい。⁽³⁾ なお、わたしの発表論文はⅢ章に全文を掲載する。

まず、山本氏の「富士信仰と洞穴：『人穴』と『御胎内』にみる近世庶民の旅と信仰」では、近世富士信仰の変遷を、聖地「人穴」から「御胎内」への推移に焦点を併せ、その経緯を辿る。富士講の開祖角行（1541～1646）が正保3年に106歳で入定したという「人穴」と呼ばれる洞穴が行者たちの修行の場として神聖視された17世紀から、食行身禄（じきぎょうみろく）が18世紀前半の享保18年（1733）富士山中で断食入定以降、18世紀中頃には洞穴「御胎内」が聖地の中心として、庶民の間で隆盛になる。なぜ、富士信仰が西南の「人穴富士山麓」から、反対側の北東吉田口に近い「御胎内」へと推移したのかは、基本的には江戸に近く、登山がより容易になる条件があったことを前提にするという。さらには、「御胎内」という変化に富んだ洞穴の内部を人体の内部に見立て、子かえりと呼ばれる岩、乳房や肋骨に見立てた岩など、子安信仰が表出する場に仕立てて、脱皮新生あるいは再生や、男女和合などを説くことで、庶民の人気を確実にしたものだとする。

セッション2の梅沢ふみ子氏の「徳川時代における恐山巡礼の発展過程」では、現在、口寄で有名な下北半島恐山では、口寄は20世紀に入ってから盛んになった歴史の浅いものであり、むしろ、江戸時代以来庶民に親しまれた恐山信仰は18世紀中頃、日本の至るところで盛んになった庶民信仰と共通の要素を持つものであることを明らかにした。18世紀～19世紀にかけて庶民の寺社への旅が盛んになる理由のひとつは、幕府による規制が弛緩、さらには旅に必須の道路事情の改善、宿泊その他の施設の整備により、当初は修行としての信仰の旅が愉楽へと変わっていき、講組織の発展が特権的な人たちではなく、普通の庶民の旅に大いに寄与したこととする。

恐山の近世以前のことは不確かだとし、16世紀に園通寺が再建され、釜臥山に位階が授けられ聖山とされたことから同山の近世庶民信仰の歴史が始まるという。恵心僧都作とされる地蔵が18世紀以降の庶民信仰の中心となるが、恐山の地蔵信仰は、病気の平癒、悪鬼除け、死んだ子供の成仏、さらには遭難除けなど庶民信仰として特異なものではなかった。特に恐山信仰でご利益とされる遭難除けは、この下北半島が江戸時代、北前航路による東北の良質な杉材の材木積み出し港であり、船の安全を祈願する北前船などの船主の寄進も多かった昔を物語るものだという。こうした繁栄の姿は近代以

降，歴史から消えることになり，現在はイタコの口寄りに代表される存在になったとするが，江戸時代の信仰のあり方は庶民信仰として普遍的な姿と考えるとよいと思われる．興味深い点は，2件の山岳信仰に関わる発表とも，火山としての自然がもたらす造形の不思議を人間社会の側に引き寄せ，そこに託された信仰のあり方を問うものであったことである．

わたしの発表内容は，以上2件の発表のような特定の場所の信仰とは異なり，浄土真宗親鸞聖人の聖地を個人が巡拝する旅日記の記述をフォローするものである．該当する時代は山本，梅沢両氏が指摘する19世紀初めの庶民信仰の隆盛期にあたる．ここでは，富士信仰，恐山信仰のようにある一定の信仰の全般を扱うというものではないが，この時期の庶民個人の旅の実現過程を追うことで，捉えようのない信仰の実態が，庶民生活のなかでいかにも合理的に活かされている一面を垣間見ることができる．その意味では，庶民信仰のひとつの具体的な姿を提示した点で，前2件の発表を補完することにもなると思われる．予め調整したわけではないが，3件の発表を通して，江戸時代における庶民信仰の多様性が浮かび上がる結果になったことは，信仰に事寄せながらも心豊かに生きようとする江戸時代の庶民の知恵のあり方を感じさせる．

Ⅲ 近世の日記に見る旅と災害—19世紀庶民の旅日記「虎勢道中記」を中心に—

はじめに

ここで紹介するのは，江戸材木町の商人が供一人を連れて，板橋から川越，秩父三十四番札所巡拝，富岡，妙義，碓氷峠，上田，姥捨，善光寺，柏原，新潟，月山，仙台，松島，金華山，仙台，白石，福島，郡山，宇都宮，草加，千住の51日間の旅を綴る日記「虎勢道中記」である（図2参照）．この日記は国立歴史民俗博物館に所蔵され，すでに同館の常設展で紹介されていたものであるが，活字本に刊行されるなどして，分析されることがないものであることから，ここに紹介したいと考えた．



図2 「虎勢道中記」著者の旅程（江戸～江戸）



図1 「虎勢道中記」表紙

弘化4年(1847)3月6日に始まる旅の途中，3月24日の夜発生した善光寺地震に新潟の宿屋で遭遇した様子が詳しく記されている．その記録を紹介することも目的のひとつだが，それに限らず，この日記がごく普通の江戸の，特に歴史に名を残すといた人物ではない商人の手になるものであること，真宗の門徒であり，親鸞聖人の高弟二十四輩の越後・東北方面の寺院旧跡を巡拝しつつ，併せて名所旧跡を訪ね，縁起などを写し，旅の経路を絵図に表わす丹念さを持ったものだからである．他者に旅の

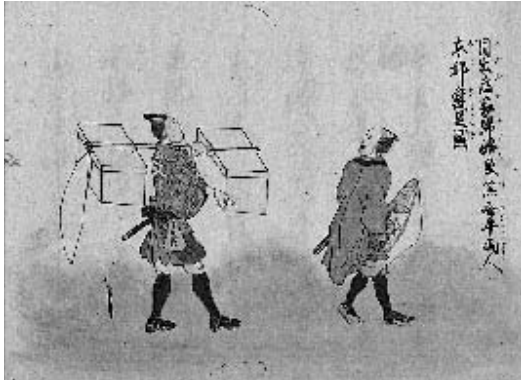


図3 著者と供の旅立ち

醍醐味を伝える目的も密かに抱きつつ著したと推定される。

作者の名前は不明だが、著者自らを目出度屋帰路良（めでたやきじろう）、供の半次を恙無平（つつがなしへい）と日記中で仮称している（図3参照）。これは縁起を担いでのことだという。なお、「虎勢道中記」と名付けた理由について、虎は千里の道を1日で往復するという、その勢いにあやかっただとしている。

著者は江戸に出て五代目の商人として材木町に店を持ち、経済的に余裕のある生活を営む人物であるらしく、また、旅の経験も豊富に持つ人物である。そのことを日記のはじめにつきのように語る。

1. 天保11年（1840）中仙道→善光寺→木曾路→京都→難波→讃岐→厳島→大坂→和歌の浦→高野山→伊賀→伊勢の80余日間の旅を経験したが、奥州、越後の旅を経験していない。
2. 健康で自ら歩き、神社仏閣を自らの目で眺める旅をしてこそ「生涯の徳」というべきものがある。

しかしながら、実際に旅日記を見ると、真宗門徒として親鸞聖人旧跡歴訪に限らず、この旅で果たしたいと考えていたいくつかの目的も見えてくる。それは、五代前の祖先の出た村の寺に行き、先祖の墓所を確かめ、供養することである。

日記は三巻に分かたれているが、それぞれの巻ごとに内容的なまとまりのあるものではなく、単に綴じ目の平均化を考えたに過ぎないようである。

本稿の末に一日ごとの出発地点と終着地を記し、宿泊先の知人宅あるいは旅籠屋を記した付表を付けておいた。これによって、いつ、どこを通過した旅なのかがわかるようにした。また、二十四輩関係の記事を摘記、また、その他絵図などのある場合を特記欄に記した。

1 旅日記の行程と特記記事



図4 秩父34札所巡り

この旅日記のなかで、筆者自身が熱を帯びて記述しているのは、3月6日の江戸出発後、半月あまりを経た3月21日、22日あたりの越後高田の親鸞聖人の数多い旧跡を訪ねおえた段階、そこで一段落した後の大宴会、ついで、弥彦神社参拝を終えた3月24日晚、予測もしなかった地震を体験、続いて先祖の出身地打越村での先祖の墓所探しである。これに5日を費やし、3月29日に至る。これらは往路での最大のイベントであろう。

続いて、三条での祖師旧跡の見物、この付近で盛んに利用されている臭水油の「がらめき」の見物、4月1日新潟での芸者6、7人を呼ぶ宴会で一区切りである。

この後、山形鶴岡に入り、4月7日からは月山、羽黒山、湯殿山を参拝し、大沼を経て、多賀城址、

仙台へ向かう。4月12日、仙台では原田甲斐の屋敷跡、伊達政宗の廟所などをみて、松島、塩釜明神、4月16日金華山へ向かう。ここまでで、ほぼこの旅のメインイベントを果たした感があり、旅の行路を示す絵図も松島の絶景の写しが最後となる。後は奥州路を下り、宇都宮安養寺の旧跡を見物、縁起を写し、4月25日に江戸材木町の自宅に無事帰着した。

以上、簡単に行路を挙げたが、ここでは二十四輩巡拝の実態を知る意味で、(1)越後高田の親鸞聖人の数多い旧跡、旅のリズムを保つ工夫が込められた(2)高田三国屋での大宴会、予測しない(3)善光寺地震の体験、なんとか先祖の痕跡を確かめようと奔走する(4)打越村での先祖の墓所探しについて、日記に記された内容の検討をし、旅日記としてこれらの記録を残した意義について考えておきたい。

(1) 越後高田の親鸞聖人の数多い旧跡

まず、3月21日の天候は「前日暮方より今四時まで雨天、後晴ル」とあり、大雨であったので、出発を見合わせ、四ッ時(午前10時頃)空も晴れたので出発とある。なお、天気が特に悪くなければ、旅を通じて、だいたい五ッ時(午前8時頃)出発し、宿泊の宿屋に着くのは夕方の七ッ時(夕方4時頃)が順調な場合の日程である。

さて、21日は前日新井に到着しており、新井御坊の巡拝から開始した。この堂は焼失してこの時は跡地を確かめただけに終わる。新井より二里の高田に入り、町屋が家ごとに小屋根を一間ほど出しているのは、雪が深いので往来が出来ない時のためだと観察した。続いて西の連枝の瑞泉寺を拝した。本道16間四面、地中4寺を持つという。高田御坊は東本願寺に属し、宝暦4年(1754)に建立された立派な造りとする。いずれも東の浄興寺、常教寺を参拝した。「祖師聖人配所草庵御影」の縁起を記す。以下は縁起写しの一部である。

抑此御影の濫觴を尋ね奉れハ開山聖人三十五歳の御時越後の国府へ流刑にあひ為ふ、頃ハ承元丁卯の年三月中旬花路を出為ひ、同月下旬に越後国府に下着遊し、埴生の草庵ニ御住居まします時に越後の国頸城郡高田高雲山最勝院性宗寺開基は祖師聖人の御直弟にして真性坊と号して越前国和田村居住すといへども余りに御名残のおしけれハ越後の国府へ参着て聖人へ見参り奉しに物哀れなるあばら家の御住居、見るに忍ず泪にむせびけれハ聖人の仰にはこれみな衆生齋度の為なれハ深く嘆く事なかれと宣ひて御念仏のみ遊しけれハ…御影を御書き残し被下度よしあつく願ひ奉れハ…三十五歳の御尊容自ら御画遊し末々の御門葉へ御形見と思召残し被下たる御真影…靈宝也

仏光寺御門跡越後高田御坊 役者

要するに親鸞聖人が流刑に遭い、この地に来た時、門弟に与えた直筆の御影の寺宝の由来を伝える由緒である。この日記中には、こうした類の寺宝に纏わる聖人の仏徳を称える縁起を写し取ったものが多い。

東御坊の光源寺、真言宗国分寺を巡拝し、竹の内旧跡を拝む。ここには親鸞聖人が5年間流刑中の37歳の時に造作した木像があり、開帳中であったので、青銅100文で拝顔した。この木像の縁起も写し取っている。居多明神にある親鸞聖人親筆の日の丸名号なるものも青銅10文で開帳中を拝した。この「日の丸名号」とは、日の丸のなかに六字名号を記した宝物である。その縁起も記している。こうした縁起を写すなどのことは、旅中のメモとして記録し、後に浄書したと考えられる。こうした縁起

を写す行為から、著者が縁起に興味を抱いたり、傾倒しているという様子は感じ取ることにはできない。むしろ、真宗門徒の一種の義務感といった乾いた感覚が感じ取れる。

なお、ほとんどの神社、仏閣での宝物の参拝は錢100文程度の参拝料を取るか、あるいは案内人の説明を受けるための案内料金を支払っての参拝である。無料というのはなかなか例がない。さて、親鸞聖人の旧跡を数多く参拝した後は旅も一段落したと考えたのであろうか、大金をはたいての酒宴を催した。

(2) 新潟での酒宴二ヶ所



図5 新潟会津屋での宴会

この日、3月21日は、今町（現在の直江津）に泊まる。今町は当時高田城下の外港として栄えた。この日記の主人公目出度屋帰路良の観察では、「家数多く賑しき所、当大国繁地四、五箇所其の一つ」、あるいは「丹後、但馬或ハ北国筋並松前などの大船入津の湊にて家数千六、七百軒と云う。…川辺に米蔵並びある」として、繁華な港のようすを伝える。ここの小笹屋へ宿泊を取るが、下女に誘われ、供の半次に唆されて、中島町の三国屋に行き、芸者を呼ぶ酒宴となり、甚句踊り

などを楽しんだ。

また、同じく新潟でつぎに述べる地震を経験した後ではあるが、4月1日新潟の会津屋に宿泊し、ここでも芸者6、7人を呼ぶ大宴会を催した。狐拳、庄屋拳で散々楽しんだ後、寝間に伽を呼んだ。(図5参照)

恐らく、こうした酒宴はかなりの強行軍の旅の疲れを癒す息抜きであったのだろう。

(3) 善光寺地震の体験

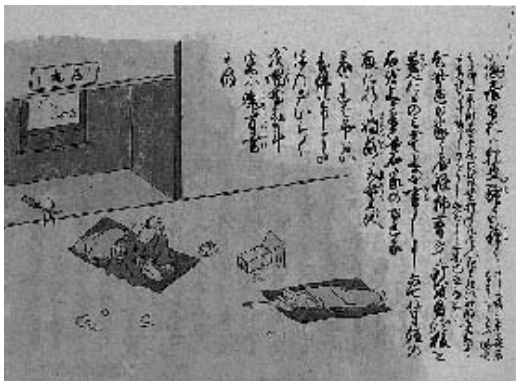


図6 地震に襲われる

弘化4年3月24日夜善光寺地震が発生した。著者は柏崎を出て、弥彦神社を参詣し、吉田の丹波屋でこの地震に遭遇した(図6参照)。地震はマグニチュード7.4と推定される直下型地震で、激しい揺れに、善光寺の寺領である善光寺町8町がすべて倒壊則出火という惨事で、ここだけで2400人、この地震全体では1万人にも及ぶ人が圧死、焼死したと考えられている。震源断層は現在も地表に露出、確認できるほどの大規模な断層面であり、地震の規模も大きかった。

さて、揺れによるよほどの恐怖からか、その時の体験が詳しく記されている。目出度屋帰路良が記す地震体験は以下に引用するが、長文なので、内容上区切りをつけて表記する。

* まずは、地震発生の様子について

扱湯屋より丹波屋方へ立戻りけるに無程なく夜飯持出候而まま兩人喰事致し六半頃より床に伏寝入ける、然ル処男女のわめく大声すさまじく寝耳に入ふと目覚メける所、こはさもいかに大地震にて家鳴りしてうごく事大浪のうつごとく、依而早々外へ走出んと思へども何ら一夜泊りの家

を且は寝入はななるゆへ方角を失ひ、出る所を爰かしこと思ふうち行灯はゆれ消へ、猶更不知其上立んとすればよろよろしせん方もなく唯飽きて居けるに、往来にては此地の男女以前の大地震に懲居すれハ猶更騒き強く（但し以前三条大地震当年二十ヵ年跡也、その節三条の御坊御堂東町家並押潰凡千人程も死す、此時当所にては家十軒斗損し候と申候、此所より三条迄直道三り）、尤此辺の家々屋根柿葺にて釘を用ず板を並べたるのミにて上へに重しに六、七、八寸位の石を上ケ置、此石家のゆれる故に折々転落ツ、如此大地震なれば予ハ只念仏を申たまんざいらくを唱ゆる斗、実に途方暮其時心中に思ふ様は、先年当国大地震節三条人弥彦の辺家崩多く死と聞く、我今百余里の此方に今此家崩れ押にうたれて此所の土となる事哉と心配大方ならず、然ル処四ツ時前におよび漸震は静相成、先は命を拾しごとく思ひ致し大安心、夫より床に入休未タやむらざる内又候小震致し夜明け迄都合五度也、

「六半頃」寝たところ、人々が大騒ぎをし、また、地震の鳴動と大きな揺れで目覚めたとある。地震発生時刻については記されていないが、善光寺付近では夜四ツ時（夜10時頃）と推定されている。立とうとするがよろけて立ち上がれないほどの揺れであったといい、逃げようにも場所がわからず困惑したことが記されている。また、板葺きの屋根に載せた石が揺れる度に転び落ち、念仏と万歳楽を唱えるしか手がなかったという。20年前に三条で大地震があったことに話題が転ずるが（文政11年〈1828〉11月12日死者1681人、家屋倒壊1万3千余軒、マグニチュード6.9）、この時の記憶が地域の人々には強く蘇った模様である。

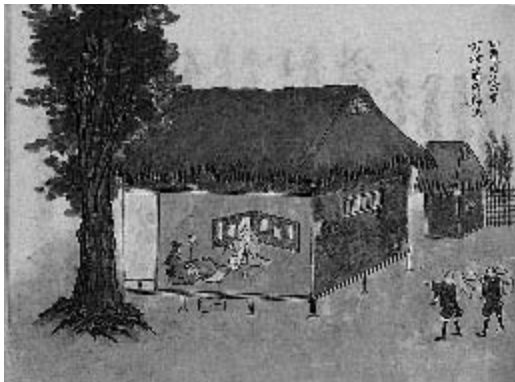


図7 臭水油を焚く百姓家

* 周辺地域の被害について

此所の少し前に川幅八、九間斗の小川有、尤兩岸に高く土手有此高さ七、八尺斗り水は深き様子、此川の水地震の為にゆれ動き水兩岸の土手を越す、亦此川に折節年貢米を積たる舟掛居けるに如斯水の動き強きゆへ右米船を陸へ打上ケ二艘ハ破れ三艘はしくり返り水に溺、依て跡にて此米を水中より曳上げる杯の騒もあり、又は隣家へ別条なきを互いに悦行来をなす、是等

の騒大方ならず、其うへ翌日打越むらへ相越承り候得は打越近辺の苗代土と水とゆれうごき強ゆへ苗一ツに寄損ず、是を名主方へ相届て杯の噂、又ふしきなるは妙法村庄左衛門の宅火むかしハ当家となる所近来此火当村にて十軒斗りに相成ル由の処、右地震の砌田中所々にて此火燃しとかや、後日此妙法寺村へ相越けるに或家にて右の火を見せ呉家内の者申て曰当村の火是迄取得る者少し、然ルに過日の大地震より此方数軒火の道筋を知り呼火なすと云う、夫より加羅目岐の山手地中より油を取る所へ相越けるに此油も地震此方常より多く取れると云う

付近を流れる天井川幅8～9間の水深8尺（2.4m）ぐらいの川水が地震で揺れる度に溢れ出たり、年貢米を運ぶ舟が米ごと陸に打ち上げられたり、川のなかでひっくり返ったりしていた。川から米を引き上げるなど、人々は大騒ぎだったという。また、五代前の先祖出生地の打越村（現在中之口村）では、苗代が地震のために一筋に寄ってしまったという。新潟では、地震以前から臭水油が出ているが、地震後はいろいろな所が出るようになったことなど、この地域での地震後の様子を伝える（図7

参照)。

* 善光寺地震のかわら版の写し

後日途中にて聞及ひけるハ右地震にて信州善光寺近辺人家同国飯山城下近辺人家多くつぶれ人多く死すとの噂もつばら、然といへども未タ是を実とせず夫より行程に行くほどに此咄広大なり、其晩予ながら心中の悦大方ならず少四、五日相違にて無難にて帰るハ実に神仏の加護と云べし、扱此地震の初りハ夜五つ時過より四つ時少々前迄短夜とハ申ながら一時不足、翌二十五日夜小震三度同二十六日夜小震四度、夫より日々少しつつ折々震ふ、猶後二十九日同国三条町通ける折大地震にて所の老若家より往来へ駆出大さわぎをなす、此時昼九つ頃なり、尤越後高田町近辺人家押つぶれけるは此地震の節にて前の善光寺辺の地震とハ日限違けるよし、先年当国大地震の節も跡四、五日間日々少しつつ震イ止まざしりと云う、誠々古来まれなる変事、依て記テ置ぬ（以下図と文は板刷りを写すとある）



図8 「信越大地震」の写し



図9 かわら版 信越大地震

噂では信州の飯山辺りで多くの方が死んだというが、この話は各地へ行くほどに広まっていたと書いている。余震は度々した。29日昼頃、三条を通過した時には大地震がおり、人々が家の中から駆け出してくるほどの大地震であったという。なお、29日の地震は善光寺地震の最大余震として記録され、善光寺辺でもこれを伝えるかわら版も出ている。なお、数多くのかわら版が地元信州で発行されたひとつの理由は、善光寺が開帳中で、全国から多くの参詣者が来て居り、その人々が被災したからである。この余震は、地震学的には善光寺地震とは別の断層が動いたために起きた別の地震と考えられている⁽⁴⁾（宇佐見 1996）。この地震による被害は、善光寺地震発生より5日しか経過しておらず、地震の被害を区別することが難しいとされている。地震学的には別のものでも、震災地の記録では一括りに捉えられる。

善光寺地震については、江戸でも地震後4、5日して多くのかわら版や地震を伝える鯰絵が出た。「虎勢道中記」中にもその一辺が書き写されている。元になったと思われるかわら版も参考のために掲載しておく（図8・9）。

(4) 打越村での先祖の墓所探し

この旅の重要な動機のひとつと思われる先祖供養のための墓所探しでは、著者は苦勞を惜しまず、所在を突き止める努力をした。これは、18世紀中期頃江戸に流入する人々の多くに共通する課題と捉えらるとなかなか興味深い。そこで、そのプロセスと著者の努力の跡を辿っておくことにしたい。

吉田町で地震にあった翌日の3月25日いつも通りの出発時刻である朝五ッ時（8時頃）吉田を出て

富永、小島、長所などを経て打越に着いた。ここまでの距離は3里とある。

著者によれば、先祖与八郎は打越村の出身で、自分で五代目、100年以上を経る。父の代より先祖の墓を尋ねることを思いに掛けていたが、漸く実現した。打越村では、早速に、善六という同じく打越出身で現在は下谷三ノ輪で湯屋を営む者の妹の嫁先を訪ねた。すでに書状で頼んでおいたので、打越村の仏照寺へ話しがつかはしたが、僧侶が生憎留守であった。仏照寺は二十四輩の旧跡のうちに入らないが相応に立派な寺であった。役僧の薦めに従い僧侶の帰りを待つことにしたが、茫然と待つのも無駄と考え、26日は僧侶の帰りを待つ間に角田の大岩窟を見物することとした。角田では舟を雇い、海辺を見物、また新潟の女は男を凌ぐ働き者であると感心した風俗図を描いている。その働く様子は江戸の女などにも見せたいものだとしている。さて、26日の夜以来、仏照寺では先祖与八郎がこの寺の檀那か否かを調べてくれたが記録がなく、村一番の年寄りで80歳になる者の話などを聞いたが先祖与八郎の寺は不明であった。そこで、名主宅へ出向き、古記録や集帳（江戸では人別帳という）を調べてくれたが、不明。燕町の浄土真宗専要寺で調べてもらったが、ここには安永6年（1777）以前の過去帳はなく、不明であった。専要寺へ寺替えする以前は溝古新村の清伝寺を菩提寺としたと聞き及び、同寺に出向いた。しかし、この寺にも元文以来（元文元年＝1736）の帳面はあるが、以前はないので不明であった。真宗の周辺諸寺をあたり、可能性がなくなったので、打越村仏照寺に戻り、経料として刳銭200疋を上納し、法事を営み、これにて先祖供養の懸案を仕上げた。

こうして次々と伝手を頼って情報を収集し、先祖の墓所の寺を探す過程で出会う人々の多くは、この村から江戸に出た人々の結い縁の人々であった。このことは18世紀中頃の江戸の都市としての繁栄、膨張を物語る傍証であると同時に、また、そうした人々の中でも、江戸に生活の足場を築いた人々の後裔が先祖供養を思い立ち、故郷探しの旅に出る社会現象の一端とみなすこともできるのではないだろうか。

2 旅への動機と道中案内記

(1) 道中案内としての「二十四輩巡拝記」

この旅の筋道を辿れば、親鸞聖人の24人の優れた弟子に関わる旧跡を尋ねる旅であることは一目瞭然である。なぜならば、歴訪する真宗寺院の圧倒的な数、旧跡に関する縁起の写し取りが日記の中心を占め、なによりも著者自身が門徒であることは明らかだからである。したがって、この旅は、恐らくなんらかの案内記に基づく順路を辿っていることは明らかである。「二十四輩⁽⁵⁾巡拝記」として、公刊されたものの一冊を例に、どのような形で道中案内が成され、「虎勢道中記」はそれをどの程度念頭においての旅であったのかを簡単にみておきたい。

まず、二十四輩とはなにか。親鸞在世中、直弟24人を選んだという説もあるというが、覚如（1270～1351）が東国へ下向、如信（1235～1300）三十三回忌に二十四輩の門弟を集めたことに起因するといいい、これには仏光寺の空性房了源が関東に教団の勢力を伸ばそうとしたことに対抗したものである⁽⁶⁾という。

しかしながら、江戸時代以降、二十四輩は寺院巡拝を兼ねた物見遊山のコースになってしまったという。そのひとつの典型は十返舎一九の『金草鞋』の「二十四輩御旧跡巡拝」（文政6年＝1823）であろう。十返舎一九はここで、『東海道膝栗毛』の弥次郎兵衛と喜多八の登場人物にあやかって、鼻

毛延高と千久羅坊という二人の人物を設定し、これにダジャレをいわせる趣向を採っている。文化10年（1813）刊行の『金草鞋』はよく売れ、初編「東都」編から次々と道中案内記を仕立て、東海道、西国、木曾、常陸、奥州、越後、西国33カ所、坂東33カ所、秩父34カ所、身延、善光寺、四国88カ所、最後は肥前・長崎、安芸・宮島まで全国の道中案内記版として、編集が何度か繰り返されたという⁽⁷⁾。「二十四輩御旧跡巡拝」はこのうちの第16編に収められている。北尾美丸が描く情景を伝える絵が各葉に多用されている。なお、「金草鞋」とはいくら履いても磨り減らないという意味も込められているという。

「虎勢道中記」の著者が自分を目出度屋婦路良、供の半次を恙無平と作中の名を与えているのも、十返舎一九の『金草鞋』にならったものではないかと推定される。また、「虎勢道中記」に挿入された多くの絵図も当時刊行され手にすることのできた道中案内記を通して、道中記もののイメージがすでに著者のなかに形造られていたと考えられる。

(2) 『親鸞聖人御旧跡 二十四輩参詣記』（享和元年〈1801〉刊行）

ここにみる『親鸞聖人御旧跡 二十四輩参詣記』（以下「参詣記」と略す）は大坂書林（海部屋勘兵衛、小刀屋六兵衛、河内屋太助、勝尾屋六兵衛）から享和元年（1801）2月に刊行されたものである⁽⁸⁾。凡例によると、宝暦7年（1757）、同9年（1759）、同13年（1763）、明和2年（1765）の4回にわたり、それぞれ120日～250日を掛けて道程を定め、山号院号を確かめたものであるという。参詣の順路、併せて示された里数（地点間の里数、丁以下を略）を記すと次のようである。

京都本願寺を出、越後国分丸山まで（143里）→松本→高田大橋（78里）→新発田（60里）→出羽六郷（70里）→盛岡（21里）→仙台（52里）→福嶋（23里）→棚倉（26里）→常陸金沢（11里）→下妻（109里）→新地（58里）→浅草（29里）→麻布（5里）→三島・沖沢（58里）→京本願寺（111里）合計914里2丁の里程、200の旧跡を尋ねる案内記である。真宗寺院東西併せて164寺、浄土宗、真言宗など他宗派寺院22寺、神社6社、在家8軒が含まれる。

親鸞流罪後、布教活動の中心となった関東を中心とする旧跡が13寺以上所在する国は、常陸36寺、越後27寺、下総15寺、越前14寺、三河13寺などである。

すでに「虎勢道中記」で高田新井辺での旧跡の参詣の実際に触れた。

以下では、「参詣記」と「虎勢道中記」を越後新潟へ向かうコース辺を比較しておく。

「虎勢道中記」には高田御坊辺で多くの旧跡を参拝しているが、「参詣記」では、北国街道と中山道の二手に分かれるコースが示され、この付近については、変則的に松本→信州柏原→戸隠→柏原戻り→高田→柏崎→浄善寺（柏崎）→浄福寺→鉢崎のコースと、中仙道小諸→追分→軽井沢→松井田→安中→前橋→高崎→熊谷→行田→加須→栗橋→磯辺→古河→棚倉→金沢→鉢崎へ向かうコースが示されている。

そして二つのコースともに、柏崎、出雲崎、寺泊を経て弥彦へ向かう。「参詣記」の記述は、次のように里程、脇道、旧跡としての由緒などが摘記される。

一里半	弥彦	(越後一ノ宮),
一里半	吉田	町屋
二里	燕	町屋 信州川舟渡シ
一里	三条	町屋 東方御坊 本堂十二間四面, 妙法寺庄左衛門 火出ル

三条より妙法寺へよれば半道廻り也

三里 加茂

二里 田上

東方 西養寺 祖師聖人かやをはりにて御つなぎ植させたまふとて、今二つなぎたるかや
生るとかや、田上より半道北往来右方水の中より油涌出ル

三里 にいつ 町屋

半みち からめき村 泊なし

この村半七という百姓あり此家にともし火出る、是ハゆるりの隅にあなあり、此あなへ一尺五寸斗の竹を差し込ミて付木にてともせば竹のふちの上もゆる、是越後七ふしぎ也

十二丁 同村の山 此山に油わき出ル、からめき村茂介といふ百姓の油とかや、此池はふかさ一丈五、六尺もこれ在、まはり十二間にして六角にわくを入、板にてかこいあり、その一と間二間ツらなり、その中ゆだまのごとくわき出ル、是越後七ふしぎ也

「参詣記」はこの箇所、別ルートのあることを四角の枠内に括って解説を付けている。

是よりにゐがたすぐ道の次第
一里 一、いわむろ
三里 一、あかつか
二里 一、打込ミ とやのへよれば半道廻り、もどるときはとやの下の方ゆくへし
三里八丁 にゐがた

以上が「参詣記」の道中案内だが、「虎勢道中記」では、この案内記が示す道中がどのような形で実現されているのだろうか。

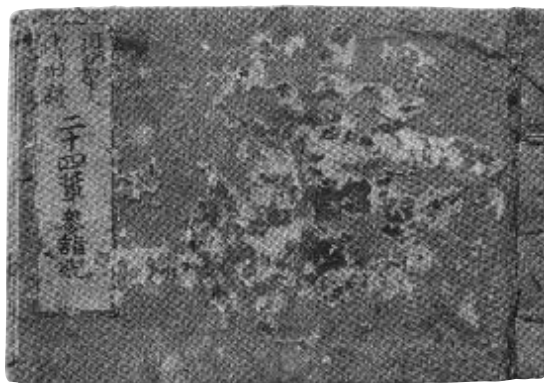


図10 「二十四輩参詣記」表紙



図11 弥彦・吉田辺案内

「虎勢道中記」の著者は、弥彦神社を参詣後、吉田町で宿泊、ついで先祖の墓所探しに打越村へ向かった。「参詣記」の四角で括った「打込ミ」とあるのが打越村である。ここで「虎勢道中記」の著者は5日間の滞在の後、燕町、信濃川を鑑3文の渡賃を支払い、三条に入る。三条では、東御坊、西御坊に参詣した。「参詣記」には東御坊のみ上げられ、西御坊に言及されていない。「参詣記」にある妙法寺村庄左衛門の火は「虎勢道中記」でも見物して、著者目出度屋帰路は加茂町へ出る。ここまで

はすでに1-(4)、先祖の墓所探しの項で、説明した通りである。さて、翌日3月30日には、加茂神社参詣、延命地蔵、吉田を経て田上で「繫樞縁起」の西養寺を参詣する。新津、がらめきの穴を見学、続いて善照寺へ参り、「八房梅御跡略縁起」を写し取る。絵にも表している(図12参照)。

「参詣記」では、善照寺について以下のような解説を付けている。

東 八房山善照寺 祖師聖人つけ梅御植させ給ふとて、今に花卉ニ梅ハツツなる也、(略)

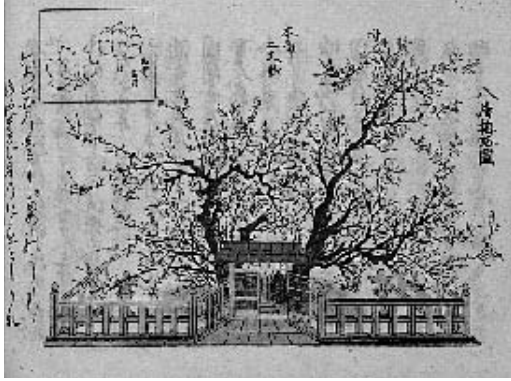


図12 八房梅略図

この後の「参詣記」に示されたコースでは、3回収穫できるという聖人お手植えの栗の木のある孝順寺(保田村)、無為信寺(水原)、西方寺、浄光寺、真浄寺、真宗寺と続くが、「虎勢道中記」においても、これらの旧跡に沿って移動している。

「参詣記」は西本願寺についての解説が見られない箇所があり、宗派の違いによるものと考えられるが、旧跡には属さないものの、がらめきと称せられた石油による灯火の利用については、双方ともに、越後の七

不思議として丁寧な説明を付している。

「虎勢道中記」の著者が採るコースでは、「参詣記」が挙げる旧跡、その他を選択的に参詣、あるいは見学している。もちろん、「参詣記」が出版された19世紀初頭からほぼ半世紀を経過しての二十四輩巡拝であるから、その間の地域の変貌は当然推定される。今、その実際を検証することはできないが、結論的にいえば、単なる道中案内記ではなく、形骸化したとはいえ、二十四輩巡拝という宗教的名目を保つ道中案内記は、一世紀が経過してもそれなりの有効性を持っていたといえよう。



図13 奥州松島塩釜略図

最後に付け加えておくならば、「参詣記」では、芭蕉の句で著名な景勝「象潟」と「松島」の2件の景色を描く図を載せるが、「虎勢道中記」の時期には、景勝地象潟は文化元年(1804)の地震による隆起で、潟が失われ、さらに本荘藩による開発によって田野と化していた。このため、著者は著名な蛸満寺にも立ち寄らず、ここを通過するのみであり、昔景勝地であったことにも触れてもいない。付けたしながら、この開発によって同藩は3万石の増収となったという(長谷川成一『失われた景観一名所が語る江戸時代』吉川弘文館、1996、歴史民俗博物館展示図録『ドキュメント災害史』2003)。

注

- (1) 明暦元年「新板撰津大坂東西南北町嶋之図」が注目される点は、いずれも木版、縦長の版形、その結果として東西に伸延された街区など、明暦3年「新添江戸之図」の先行形態を示していると考えられる。この後はあまり踏襲されない江戸図の刻された方であり、恐らくは、「新添江戸之図」はこの大坂の地図を模倣して作成されたものではないかと推定される。これに先立つ20年以前の寛永9年（1632）木版の都市図としては最初の「武州豊島郡江戸庄図」がある。この図はその制作についての詮索があまりなされていないが、江戸城の天主を中央に刷り込み、大名屋敷を書き入れ、江戸の都市としての成長を誇示する意図を秘めて、幕府が刷らせた江戸図ではないかとわたしは推定する。西国大名の江戸における拝領屋敷に関する記録を見ると、ほとんどが「武州豊島郡江戸庄図」に載る自邸の場所を書き写している。明暦3年の江戸大火でほとんどの大名屋敷が焼失、当初の拝領場所から移転しているから、この絵図が典拠とされたのである（拙著『江戸城外堀物語』ちくま新書、1999年）。明暦元年「新板撰津大坂東西南北町嶋之図」の大坂図の系統を継ぐものとして明暦3年河野道清版があるとし、版元名を欠く明暦元年版を後世の偽作とする説もある（山下和正『地図で読む江戸時代』柏書房、1998年、143頁 右段の注①・②）。但し、(2)の海野一隆論文では版元名を欠く事実は指摘するが、疑作説は採っていない。総合的な検討がなされることを望んでおきたい。
- (2) 海野一隆「北米における江戸時代地図の収集状況—ビーンズ・コレクションを中心として—」『人文地理』第39巻、第2号（1987） 16-41頁
- (3) 山本志乃氏、梅沢ふみ子氏の発表論文はいずれも当日配布されたレジメ「Tokugawa Travel Workshop」2006, Aug.4-5による。
- (4) 宇佐見龍夫『増補 日本被害地震総覧』東大出版会、1996年
- (5) なお、論文発表後、国立歴史民俗博物館蔵『関東二十四師輩巡拝記』を閲覧する機会を得た。これは、享保12年大坂書林野村長兵衛開版のもので、まず二十四師輩の旧跡24寺を記し、ついで順拝の道順に入る。小田原儘下村善福寺、国府津真楽寺と進み、鎌倉を経て、江戸善福寺、浅草報恩寺から下総鎌田村妙福寺に入る。常州は親鸞聖人が関東布教活動をした本拠地として、旧跡30ヶ所が挙げられている。宇都宮、下総の数カ寺を経て、栗橋、幸手、千住を経由、江戸日本橋まで181里の行程を辿る巡拝である。最後に、奥州路の数カ寺を示して巻を閉じる。この行程では、祖師聖人縁の旧跡として、下総飯沼生野天神、常州生栖大明神、鹿島大明神への行程、由緒も説かれる。注（8）に述べる享和元年『親鸞聖人御旧跡 二十四輩参詣記』に70年以上先立つ巡拝記である。巡拝の環境が整備された段階とは異なるものがあると推察されるのは、関東に限られた巡拝コース案内ということに現れている。ワークショップの3件の発表が取り上げた庶民の旅が隆盛に向かう当初の旅の光景の幾分かは、ここからも推し量ることができる。
- (6) 中根和浩「覚如と二十四輩の成立」笠原一男博士還暦記念会編『日本宗教史論集』上巻、吉川弘文館、1966年
- (7) 今井金吾監修『方言修行 金草鞋』別巻、丹和浩解説、大空社、1999年
- (8) 『親鸞聖人御旧跡 二十四輩参詣記』は小山丈夫氏（長野県飯綱町ふるさと歴史館主任学芸員）所蔵本を、氏のご好意により、閲覧、利用させていただいた。記して感謝する。

附註：本論を構成するにあたり、国立歴史民俗博物館助教授岩淵令治氏に資料閲覧に際しお世話になった。また小山丈夫氏からは貴重な蔵書を借用させていただいた。UBCの後藤朋子氏には、ビーンズコレクション（注（1）の大坂図）についてご教示いただいた。またワークショップの参加に際して、アジア学部の許教授には公私に亘り、御世話になった。記して、各位に感謝する。

虎勢道中記行程表（弘化4年3月6日～4月25日）

特記欄*印は絵図挿入を示す

月	日	場 所	二十四輩関係参拝箇所	特記（宿泊先、挿入絵図他）
3	6	板橋→赤塚→白子・肘折→野火止→平林禅寺・大井		大井にて柏屋宿泊七ツ時
3	7	上久保→常連坊→竹原稲荷→蓮柱寺→川越→比企	(岩殿山安楽寺)	五ツ時出立；七ツ半時丁子屋
3	8	奥田→慈光寺→8番札所→横瀬	(岩殿山正法寺)	*武甲山両宮山上図
3	9	武甲山参詣→8番霊場→秩父34番札所順拝	武甲山参詣, 秩父霊場廻り34箇所	荒井順平方へ宿泊
3	10	9番明智寺→7番牛伏→6番萩の堂→5～1→10～13→大宮町→14・15番→妙見社	秩父霊場廻り34箇所	
3	11	16～33番→贄川	秩父霊場廻り34箇所	三峰山参詣, *札所順路略図
3	12	三峰山大権現→贄川	秩父霊場廻り34箇所	
3	13	野沢→小森→32～34番札	秩父霊場廻り34箇所	穀屋へ1泊
3	14	出牛→太田→鬼石→渡瀬→矢田→吉井→金井→福嶋		小竹屋へ1泊
3	15	富岡→富岡→抜鉾大明神→高田→妙義山権現→横川→坂中	(妙義山参詣)	中屋源兵衛方へ1泊
3	16	碓氷峠→熊野権現→軽井沢→沓掛→古宿→狩宿→追分→小諸→赤塚新田→片羽→田中		和田屋(百姓屋)へ1泊八ツ半時着
3	17	海野→大屋→上田→鼠宿→金井→横屋→坂木→戸倉→八幡		姥捨の縁起 *姥捨十三景寺中世尊院泊まり
3	18	姥捨山→八幡→稲荷山→塩崎→康楽寺→篠ノ井→御幣川→丹波島(渡賃100文)→刈萱→善光寺	姥捨山参詣, 康楽寺	柏原笠屋へ泊まり *室井→新井略図
3	19	善光寺御堂参詣, 開帳礼拝, 三輪→吉田→田子→吉村→平出→室井→願法寺→小玉→大古間→柏原	平出(彦坂藤兵衛家祖師聖人九字名号, 青銅10疋にて開帳); 願法寺(二十四輩)縁起	新井葛屋勘左衛門方へ泊まる. 加賀様通行のため早泊まり
3	20	大平→野尻→関川→二俣→板橋→照光寺→新井	明専寺(残雪にて参詣不可); 照光寺(十字名号, 青銅100文で開帳)	小筑屋に泊まり, 中島町三国楼にて遊興, 馬鹿遊びを為す, 反省. *三国楼遊興図
3	21	新井御坊→中川(御坊本堂)→栗原→田中→吹→高田→瑞泉寺→高田御坊→浄興寺→常教寺(本堂, 祖師建立)→性宗寺(青銅100文で開帳)→八幡宮→本誓寺→真宗寺→大曲→法寿院(六字名号)→光源寺→国分寺→竹の内旧跡(聖人37歳の木像100文にて開帳)→居多明神(聖人親筆)	瑞泉寺・高田御坊・浄興寺・常教寺(本堂, 祖師建立)・性宗寺(青銅100文で開帳): 祖師配所草庵縁起: 真宗寺・法寿院(六字名号)・光源寺・国分寺・竹の内旧跡(祖師聖人自作木像縁起)	鉢崎清水屋へ泊まり *鉢崎海辺図
3	22	団子浜→行き浜→柿崎(扇屋)→浄福寺(九字名号, 鳥目10疋にて拝礼)→鉢崎	扇御坊略縁起, 扇谷洪の宿略縁起, 浄福寺(九字名号, 鳥目10疋にて拝礼)	
3	23	高田関所→あげわ→笠島→鯨波→大久保(柏崎)以上1巻		吉田丹波屋四郎左衛門へ1泊 *銭湯の図 *丹波屋にて地震に遭う(善光寺地震) *かわら版善光寺地震の写し
3	24	柏崎→出雲崎→山田→寺泊→光林寺→珍明寺→法福寺→中浜→才浄寺→観音寺→弥彦→伊夜比古明神→吉田	弘智法院伝記	先祖予八郎打越村出生, 江戸に出て五代百有余年: ここにて先祖の墓所探し, 仏照寺に泊まり

3	25	富永→ゆの木→長所→打越		仏照寺泊まり *越後の女は働き者
3	26	仏照寺に滞留・僧侶の帰りを待つ間、妙光教寺大岩窟見物		仏照寺泊まり
3	27	名主方にて古記(人別帳)調べ、長所→館野→松林→大野→燕町→専養寺にて安永6年以前の帳面なし		仏照寺泊まり
3	28	滞在、先祖探し		地震後各地で臭水油多く出る、三条地震のこと、余震のこと *庄左衛門の灯火の図；加茂町にて泊まり、
3	29	仏照寺へ300疋などお礼、燕町→三条(信濃川渡し鑑3文)→東御坊・西御坊→妙法寺村庄左衛門の火(臭水油)→加茂町		*繫櫃、*がらめき *がらめきの里(百姓家) *八房梅の図 *数珠掛佐桜図 矢津田泊まり
3	30	加茂明神社→上三条→羽生田→延命地藏堂→吉田→田上→西善寺(繫櫃縁起)→尾が沢→新津→がらめき(臭水油をとる穴)→矢津田	西善寺(祖師聖人が某に与えた櫃の種の話、繫櫃縁起)；八房梅御旧跡略縁起(祖師聖人白川庄小島村佐五介方に泊まる、教化、十字名号を与える、一輪の花に8つの梅がなつて栄える	会津屋金次郎方へ泊まり、頼まれた手紙を新潟奉行所役人北山惣右衛門に届ける *会津屋にて酒肴を取り寄せ、6、7人の芸者を呼ぶ、寝間に伽を呼ぶ、甚句踊り、庄内拳、狐拳など、*新潟会津屋甚句踊りの図
4	1	考順寺(保田村)→大室→横山→水原(無為信寺)→袋津→亀田→新潟	無為信寺(二十四輩のひとつ、往古棚倉にあり、宝暦2年に当地)聖人直筆半身絵像、恵心僧都直作の太子像(円山名左衛門宅)、右縁起写し	
4	2	新潟(白山社など)	西方寺縁起、浄光寺縁起、真浄寺、真宗寺、	柳屋に泊まる、為替両替のため飛脚屋へ
4	3	新潟新町飛脚屋本間屋孫右衛門へ手形引換に行く(江戸島屋佐右衛門へ依頼済み)が、金は未着、水原飛脚屋島屋元次郎方へ出向き、為替金受け取る、亀田→新発田(託明寺)→加治	託明寺(聖人御旧跡)	猿沢秋田屋に泊まる
4	4	築地→乙村→大日堂→桃崎浜→四日市→村上→鵜渡路→猿沢		百姓善右衛門方へ泊まる、鯛焼にて酒
4	5	板谷越→ぶとう峠→小俣→小名部→小国(関所)羽黒参詣として番所へ届ける	羽黒山参詣	鶴岡伊勢屋へ泊まる、羽黒湯殿参詣は60日の潔斎(女人禁制、殺生禁断)と宿でいう；方言について論ず；小国辺にて善光寺地震の時の様子を聞く
4	6	金峰山→鶴岡		羽黒山36坊、石段下まで18丁、先達を依頼、2人200疋、他に鳥目500疋御礼、蒔銭48文
4	7	荒川→羽黒町(旅人調べ、木挽町の定宿が指定される仕組)	羽黒山参詣	清水屋市右衛門へ泊まる、風呂にて修験と話す、江戸よりの者少なしという
4	8	月山大権現、湯殿大権現→志津(以上②巻)	月山大権現、湯殿大権現	浮島見物1人12文 *大沼の図
4	9	本道寺村→横組→大沼→別大行院	本道寺村(坊家、8箇所不動尊)；羽州大沼縁起写	両国屋泊まり
4	10	大暮→大谷→中郡→長崎		*立石寺(天台宗)の図、馬場村百姓家に泊まる

4	11	中の目→灰塚→荒屋→山寺村→立石寺		仙台北下原田甲斐屋敷跡，樅の木など先代萩の名跡を尋ねる，正宗廟所，愛宕山(案内150文)，国分町清水野屋へ泊まる
4	12	平沢→落合→八幡町→仙台		*松島の凶，扇屋弥五右衛門方へ泊まる，地震に遭い，3人連れのうち2人は帰宅，1人信濃行の蓮見堅蔵と道連れになる
4	13	今市(多賀城址)→八幡→沖の石→塩釜明神→塩釜町→松島(船宿石屋にて船)→瑞巖円福寺(伊達家の位牌，政宗殉死36人家来位牌，釈迦如来像など)	松島案内記写	*松島の凶(富山大仰禅寺裏山)
4	14	高城→あてら坂→富山大仰禅寺(松島眺望6文)		大金寺に泊まる，酒肴，護摩料など金50疋，一同広間に寝る
4	15	祝田→蛤浜→桃浦→沖の浜→大原→鮎川→山雉渡→金華山	金華山大金寺，弁財天，	*東海金花山凶(表，裏)；桃浦油屋に泊まる
4	16	握飯，案内人先導にて金華山参詣	金華山縁起写	珍しき魚類列举
4	17	瓦焼場→利府→岩切→青麻権現社		18日仙台庄司屋惣七方へ泊まり
4	18	今市→原の町→仙台		白石，島屋へ泊まる
4	19	長町→植松→岩沼→槻木→宮→白石		藤倉屋に泊まる，売女進められ，伴の半次のみ買う
4	20	斎川→越河→桑折→長倉→鎌田→福嶋→伏拝→八丁目		鼎屋に泊まる
4	21	取揚→二本柳→二本松→本宮→郡山→小原田→滑川→須賀川		玉子屋に泊まる
4	22	笠石→矢吹→太田川→白河→寄居→芦野やじ		餅屋に泊まる
4	23	黒川→大田原→矢板→徳次郎→喜連川→氏家		福松屋に泊まる
4	24	阿久津→宇津宮→宮津宮神明社→安養寺→雀宮→茂原→石橋→小山	安養寺(二十四輩の1)，花見が丘御坊(六字名号)，親鸞聖人建立の霊場，略縁起	
4	25	間々田→野木→古河→栗橋→幸手→杉戸→粕壁→越谷→草加→千住→浅草→大伝馬町→小舟町→江戸橋→材木町(自宅)		

ブリティッシュ・コロンビア大学図書館所蔵
 ジョージ・ビーンズ・コレクション (江戸古地図コレクション) の概況
 海野一隆博士の調査による (1985)

後藤朋子
 2005年 7月28日

所蔵数

世界、中国、韓国図 等	40
日本図	42
国絵図、地方図	51
都市図	90
名所図	10
城図	2
道中図	33
合計	268
地誌、紀行、他	35
雑品*	33
総合計	336

* 版木 (道中図の一部)、災害関係の印刷物、地図皿 (贗作)

他大学との比較 (地図のみ)

	計	手書図	明治期の作品	最古の図
ブリティッシュ・コロンビア大学	268	19	2	1654
カリフォルニア大学ロサンゼルス校	241	45	36	1709
米国議会図書館	185	17	12	1676
カリフォルニア大学バークレー校	1619	---	80-85%	1666

世界中でブリティッシュ・コロンビア大学にしかない地図

* 新板摂津大阪東西南北町嶋之図 (明暦元年, 1655)

UBC call no. 請求記号 G 7964 .O 8 1655 Shelved at: F 2 A 3/5

* 鎌倉勝がい図 (寛政10年, 1798)

UBC call no. 請求記号 G 7964 .K 2 1798 H 2 Shelved at: Loc 1 L